

二〇二三年一月二八日

湧水の楽高鳴りて春隣  
夫の背を盾に寒風ウオーキング  
水仙や沖の汽笛を運ぶ風  
糠床をしづかに寝かす雪の夜  
針に糸通してもらふ縁小春  
日脚伸ぶマッサージ機び身を委ね  
凍雲の裂けて一直線に日矢

二〇二三年一月二七日

畑の幸ほうとう鍋にごつた煮す  
振り向けば鉄路消え去る吹雪かな  
室の蘭仙人髭をもてりけり  
地の蜜柑納屋で寝かせて春を待つ  
丸木橋渡る足下を風光る  
隧道をみみず走りす雪解水  
寒やいとコロナ籠りを耐へ抜かむ  
香煙に咽せありがたし初大師  
猫の夫ひそと伏目に朝帰り

二〇二三年一月二六日

余生いまホ句三昧や去年今年  
師の句碑を存問がてら梅探る  
北へゆく貨車は短し雪の原  
せせらぎの調べも和む四温晴  
手で分ける朽葉隠れに寒すみれ草  
ガレージは泥んこ雪を砦とす  
来光に金色と化す雪の嶺  
畏まる小さき足うら雛の客

二〇二三年一月二五日

襟巻に母の温もりありにけり  
林道の木漏れ日散らす寒雀  
日向ぼこ雪中四友揃ふ庭  
原稿にひとひら散らす室の花

二〇二三年一月二四日

底冷えの朝市の幌きしみたり  
凍蝶の翅寄せ合うて楠のうろ  
トロ箱の疵繕うて春を待つ  
自家製の野菜で足りる冬籠  
百寿てふ盆梅の白咲き満ちて

二〇二三年一月二三日

寒紅を差して写真の列に入る  
冬落暉真珠筏にひろがりぬ  
息白く通り過ぎたる負け力士

二〇二三年一月二二日

徒長枝の梅直線に活けにけり  
星空へカラカラ唄ふ凍み豆腐  
紅殻の褪せし格子や藪柑子  
野仏の供花ま新し里小春

毎日句会みのる選・二〇二三年一月三〇日

あひる

そうけい

うつき

素秀

宏虎

素秀

ひのと

明日香

むべ

うつき

もとこ

ひのと

明日香

智恵子

凡士

ひのと

ぼんこ

なつき

豊実

ひのと

ひのと

はく子

せいじ

あひる

ひのと

せつ子

明日香

みきお

ひのと

たか子

なつき

素秀

せつ子

はく子

ひのと

ぼんこ

よう子

こすもす

隆松